

～ハツとしたとき出るエッセイ～



# 坊守のひとりごと



愛知県安城市和泉町中本郷41

2018年8月30日号

## 仏さまからのサイン

それは「児童夏の集い」2日目の「多度山ハイキングコース」を登り始めて1時間の時に起こりました。小学4年の男子が軽い熱中症の症状を起こし、路上で倒れてしまったのです。この日は気温32度。風あり、コースは木洩れ日、水分補給も充分に、という状況ではありました。

児童夏の集いは、30年以上続く夏休みの恒例行事。小学生を中心に中学高校生がお寺で一泊。お勤めや仏さまのお話、リサイクル工作や清掃奉仕、ゲーム大会などで敬いの心や豊かな感性を育むことを願いとして開催。そして近年は、郊外でのハイキングも採り入れてきました。

動けない子を路上に寝かせていると、たまたま近くを一緒に登っていた年配者のグループが、てきぱきと指示をして下さり、風を当て水分を取らせ、身体を冷やすポイントに自分たちの保冷剤を当てて介抱して下さいました。聞けば、元登山支援ボランティアの方々とのこと。そのうち仲間の一人が下山して、車で下の駐車場まで送り届けて下さることに。

この頃には先行していた住職も現場に駆けつけ、事後を協議。すると、下山途中の別の女性が声をかけて下さいます。なんと現職の看護師さんでした。医学的な所見と応急処置、介護方法のアドバイスを頂いた上で、具合の悪い子と住職は、ふもと駐車場に無事到着したのです。

一方、私は約30名の本隊と合流して、山頂まで登って公園で休憩と昼食。その後の行程を変更して来た道に戻り、マイクロバスに再合流することにしました。

バスに戻った住職は、エアコンをしっかり効かせた車内で看病。「これくらいなら大丈夫」と言われていても、少し前に豊田の小学生が熱中症で死亡した事件もあり、気が気ではありません。ハイキングを終え駐車場に戻って来た看護師さんに、もう一度だけプロの目で見てほしい旨を言うと、即答でバスに乗り込んで下さり、結局それから1時間以上も、子どもの処置をし続けて下さいました。

気分や吐き気を聞き、頭と身体の体温測定、上掛けしながら各部リンパを冷やし、30分毎に無理に起こしてでも水分補給。小水さえ出れば、脱水症状から代謝が正常に戻った証拠になります云々…。

その後、全員が戻り、看護師さんに丁重にお礼を言ってバスは出発しました。こちらの名刺は渡したものの、登山支援の方々も看護師さんも結局、住所も名前も名乗らずじまいでした。

男の子は、帰りのバスではすっかり元気になって、おにぎりを頬張っていました。その笑顔を見ながら、今回の「奇跡の人々との出遇い」に深く感謝しました。「天からの応援」のもったいなさに、ただただ頭が下がりました。

しかし、これは「仏さまからのサイン」であるとも思っています。主催者として、30年以上も続けて来たという慢心＝危機管理の甘さに対する警告であると。猛暑、花火等の火気、屋外での運動、水遊び、怪我…、一つ間違えば生命や健康に重大な危険を及ぼす可能性がいっぱいです。今回の事がらは必然でした。「よかったよかった」では済まされない「天からの警鐘」として、大きな宿題を頂きました。来年からの内容・規模・スタッフ・保険など、全面的に見直していきます。仏法の先輩方は、このサインを「願い」と名づけました。仏さまの願いが届く資格を失わないよう、精進していきます。

